

会員の声 1945 年生まれから見た“戦争と平和”(その6)

—第二次世界大戦後 80 年にあたって—

世界連邦運動・金沢 平口 哲夫

2020 年 9 月～2021 年 7 月の期間に発行された Newsletter661 号・662 号・664 号・665 号・666 号に 5 回に分けて連載された拙文「会員の声 1945 年(昭和 20 年)生まれから見た“戦争と平和”」では、副題を設けていなかった。今回、(その 6)に副題を設けて完結するので、既載の拙文に以下のごとく追記することにした。(その 1)敗戦の年生まれ、(その 2)小学生の頃の思い出、(その 3)朝鮮戦争と内灘米軍試射場、(その 4)平和町・平和記念館・平和公園、(その 5)戦争当事国における被害・加害認識。



なお、(その 5)で紹介の東北大学基督教青年会館(溪水寮)関係で「戦争と平和」にまつわる逸話については、(その 6)でも述べると予告。そこで、少なくとも私の寮生活当時、逸話であったことを一つだけ取り上げておきたい。溪水寮ホールには、寮創設に貢献された石原謙先生のほかに大島正隆氏の写真が飾られていた。しかし大島氏については、寮関係者から少々伺ったことがあるだけで、詳しいことを知らないまま学生・院生時代を過ごしてしまった。東北大学考古学研究室での恩師・伊東信雄先生や、国史研究室(当時の大学院では考古学は国史所属)の先輩・入間田宣夫先生たちが中心となって編集した大島正隆著『東北中世史の旅立ち』(1987)には、大島正隆氏の実弟・大島智夫氏(横浜市立大学医学部教授)執筆の「茨の冠一大島正隆の生涯」が再録。これによれば、1932 年(昭和 7 年)、旧制二高の校友会理事選挙に学校側が干渉、これを弾劾する学生たちがストライキに入った。翌年、特高警察はストライキ責任者・扇動者として学生 12 人を治安維持法違反の疑いで検挙、正隆はその槍玉にあげられた。学校側は 12 名を即刻退学処分、そのうち 10 名はやがて保釈されたが、正隆ほか 1 名は未決拘留。留置場で言語に絶する拷問が加えられたにもかかわらず、正隆は仲間の不利になることは一切自白せず、同年中に公判開始、執行猶予となり釈放。山岳部で鍛えた身体は見る影もなくやせ衰えていた。1936 年に文検合格、4 月に東北帝国大学法文学部国史学科入学。同大学基督教青年会では、石原謙教授の薫陶を受けた。1939 年 3 月同大学卒業、4 月同大学国史研究室副手に就任。1941 年 4 月から基督教青年会寄宿舎(現・溪水寮)に入り、後輩を指導。1941 年～1943 年のわずか 3 年間に、東北地方中世史に関する珠玉の論文 6 編を発表、未発表原稿 1 編をのこした。1944 年 1 月 22 日、療養先の千葉県勝浦にて逝去、享年 34 歳。

さて、戦後 80 年に傘寿の誕生日を迎えた私は、出身中学校 12 期同窓会の期幹事の方々と協力して、12 期幹事としてお世話する最後の 12 期同窓会として 6 月 19 日に傘寿記念同窓会を開催、34 名が参加。12 期生は、11 期生 757(新設の城南中学校の生徒を含む)、13 期生 505 名と比べて格段に少ない 344 名。終戦の年度にかろうじて生を受け、80 歳の誕生日を迎えた同期生が何人いるかは未確認だが、傘寿記念同窓会を開催できたことに感無量。しかし、第二次世界大戦についても、年追うごとに同時代的な出来事のように感じられるようになった。

なぜなら、プーチン政権支配のロシアによるウクライナ武力侵攻、イスラエル・パレスチナ間の紛争が激化してネタニヤフ政権支配のイスラエルがパレスチナ・ガザ地区を過剰に武力攻撃、軍事政権支配のミャンマーにおける内戦など、テレビやインターネットなどにより目撃者のごとく情報を得ることができ、戦争と平和が混在した時空に身をおいているからである。NATO(北太平洋条約機構)は欧州 29 カ国(英・仏・独・伊など)、北米 2 カ国(米国・カナダ)、中東 1 カ国(トルコ)、計 32 カ国からなるが、NATO に大きく貢献してきた米国はアメリカ・ファーストを主張するトランプ政権になってから NATO への貢献を弱めた。一方、NATO に対峙するロシアはウクライナの NATO 加盟には強固に反対し、北朝鮮や中国との連携を強めている。日本は、米国との同盟関係だけでなく、NATO とも基本的価値やグローバルな安全保障に対する責任を共有するパートナーとして互いに貢献するようになった。この構図は、第二次世界大戦で日独伊三国同盟と連合国とが対立したのと、国々の組み合わせに違いがあっても、類似性を彷彿とさせる。世界連邦運動の主流は、国連を改革して世界連邦化することを目指している。トランプ政権のような自国第一主義は、国連の成果も台無しにし、結局、自国の益にもならない。その理由については、スペースが足りないので、別の機会に別の題名で述べることにし、この連載を終えることにする。